

Column

体操今昔 (上)

荒川御幸

本棚を整理しながら古い本のページを捲っていると“日本のオープン戦に登場！女性審判の華麗なジャッジ”の大見出しで美女2人の写真が、目に飛び込んできた。平成元年4月発刊の文藝春秋に掲載された、野球界の女性ジャッジ登場の記事で、金髪のカールが肩にかかり野球帽の下の一点集中のまなざしが、緊張感を紙面から伝えていた。しばらく見入っている内に、昭和39年の東京オリンピックのあの時のことが浮かんできた。

世界の人々を集めてのオリンピックは、戦後の国家的大イベントだった。体操競技会場の、千駄ヶ谷にある東京体育館は満員の盛況で、10月とは言え館内は人々の熱気で気球の様に浮きあがりそうな雰囲気だった。

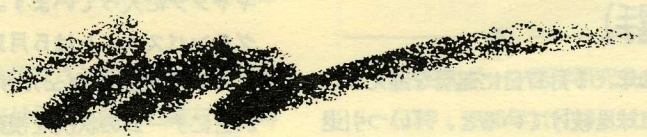
その日は女子団体戦自由演技で、日本の女子チームは旧東独とコマ以下の差で競い合い、3位入賞なるかどうかの瀬戸際だった。日本代表選手たちはノーミス。し

かも史上に残るようなベストの演技をしていた。少しずつ表彰台に近づきつつあり、緊張の中で最後の種目を迎えた。だが、チームリーダーの私のところに点数差に関する情報が全く入らない。優劣だけでも知りたいと思った。そんな時、客席のロープを越えて総監督の竹本先生（日本体育大学）が私の近くに駆け寄り「大丈夫、勝っている。あとは落ち着いて」と声をかけた。と、その瞬間、審判長のピランシェ夫人（フランス）が席を立ててツカツカと竹本監督に近づき、大きな声で一言「NO！」と場外を指さし退場させた。当時、女子の競技では運営も審判も、全部女性でなければならない規則だった。したがってこの日は役員全員が女性であり、競技エリア内に男性が入ることは許されなかったのだ。ピランシェ審判長の毅然とした姿は、今でも私の脳裏に焼きついている。時は昭和39年のことだ。

現在の日本の体操界は後退型で、先達のこの姿を思い出しながら、静御前の心境にひたり申し訳なさど憂い一層の一刻だった。

〈あらかわ・みゆき〉 WSFジャパン会員、東京五輪体操女子チームリーダー、体操国際審判員

女性スポーツを応援しています。



スポーツビジネス総合シンクタンク

SPORTS 21®